

■ 当面のドルの下値は自ずと限られる…

前回更新分の本欄で述べたように、足下のドル/円は3月安値＝109.71円処から一目均衡表の週足「雲」下限が位置する109.60円処を試す展開を続けている…。とはいえ、目下は109.71円処から一段の上値を試す展開となることで「3月高値と4月高値のダブルトップ完成を回避する」というほどの力強さは正味のところ感じられない。

もちろん、現在はある種の“非常事態下”にあるとも言え、あまり杓子定規にテクニカル概念を相場に当て嵌めて行くのは適切でないのかもしれない。前回更新分でも述べたように「今は瀬戸際外交と称せられる低次元の“チキンレース”を世界のGDPトップの国同士で繰り広げている」わけであるから、両国政府高官らによる発言が毎日コロコロと変わり、結果、その内容に一つ市場が右往左往させられるというのも致し方なし。よって、テクニカルに相場を分析する上でも多少の誤差はなかったものと見做す方が今は適切と考えてよいものと思われる。

その意味からすると、今は「なおもドル/円は109.60-70円処の節目を意識した展開を続けており、ダブルトップのネックラインを割り込むかどうかの瀬戸際にある」といった程度に見ておいたほうがいいのであろう。

仮に、ダブルトップが完成した場合、その後の計算上の下値の目安は、一つに107円台半ばから前半の水準（ネックラインからトップまでの値幅と同じ値幅をネックラインより下方にとった水準）と想定せざるを得なくなってくるわけであるが、果たして今はそこまで目線を下げて臨むべきだろうか。下図でも確認できるように、2015年6月から形成されていると考えられる三角保ち合い（トライアングル）の下辺は現在108円前後の水準にあり、これは比較的強めの下値サポートの一つであると考えられる。



まして、大半の市場関係者&参加者らは、いまだ米中交渉が完全に決裂してしまうとは見ていない。換言すれば、早期解決への期待も大いにあるわけで、当座は極端なドル売りにポジションを傾けることも躊躇われる。

実際、目下の市場は6月下旬の「大阪 G20 サミット」で実現するとされる米中首脳会談で一定の合意に至るべく、当面は水面下での実務的な交渉が続けられると見ている模様で、まだ時間的には相当の猶予があるため、なおも安易には動けない時間帯が続く。

一方、4月下旬から続いていたユーロの戻りに当座の一巡感が出ていることも、しばらくはドルの支援材料になり得ると見られる。これは、ユーロ・キャリー（新興国通貨買い）の巻き戻しによって生じた一時的なユーロ買いの流れが一巡したということであり、そうなると当面は対ユーロでのドル高が演出されやすくなり、それは結果的にドル/円の下値を支える役割も果たすこととなる。

(05月16日 11:30)